

明末の財政管理について 戸部清吏司の職掌を中心として

著者	時 堅
雑誌名	集刊東洋学
巻	114
ページ	87-108
発行年	2016-01-18
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132758

明末の財政管理について

——戸部清吏司の職掌を中心として——

時 堅

はじめに

一六世紀以降、銀の大量流入が中国の本位貨幣を銀兩、また補助貨幣を銅錢とする貨幣体制の成立を促した。こうした時代の変化に対応すべく、明朝は万暦九（一五八一）年に一条鞭法を全国に施行するなど一連の財政改革を行った。張居正の改革に始まる所謂「万暦中興」である。以降崇禎十七（一六四四）年に至る半世紀強のあいだ明朝はこの新たな体制のただなかに在ったのである。銀財政が普及し貨幣体制が変容するにつれて、財政管理の方法はどのようにに変化したのであろうか。また後継の清朝は、明朝の万暦前期以降の財政管理の変化を如何に受け入れたのであろうか。こうした諸問題を解決できなければ、明末清初にあたる一七世紀の中国、そして明清の連続性に対する理解は不可能であろう。

その変化が財政官庁の機構に現れることは想像に難くない。戸部は全国の土地、人口、税金などを管理して国家財政の制定や施行を担当する、六部の重要な一角を占めていた。ただし明代の官僚制度研究では、内閣、巡撫、科道官（給事中と御史）といった明朝を特徴づける官職について多くの蓄積があるが、中央官庁として大きな役割を果たした六部に関する研究は残念ながらほぼ存在せず、『大明会典』、『明史』に基づいてその機能が概説的に叙述されてきたにすぎない。¹⁾

しかもこうした研究には欠点が存在している。それは、最後の『大明会典』となる『万暦会典』が万暦十五（一五八七）年に編纂されたため、『会典』による限り、万暦前期から明朝滅亡にかけての半世紀強の間に戸部がどう変化したのか知るすべはない。また『明史』は次代の清により編纂されたものの、その「職官志」は概して『万暦会典』を踏襲

するのみに過ぎず、その後の経過を見ることはできない。特に戸部の事務方たる清吏司は明前期の十三清吏司より少なくとも新たに三つの清吏司が増設されたが、言うまでもなく従来においての新三清吏司の職掌と地位は不明であった。

明末の戸部に関する官撰の政書は殆ど残存していないが、幸いにも第二節で詳述する『度支奏議』に収められた上奏文から、当時の戸部各清吏司の詳細な業務内容を検討することができる。⁽³⁾したがって、本稿では万曆初期以降における戸部各清吏司の職掌に対する説明を通じて、明末の財政管理の特徴を分析し、その特徴が明清両王朝において如何に位置づけられるか展望していく。

本稿の構成としては、まず『万曆会典』以前における戸部各清吏司の設立と人員構成を分析したうえで、清吏司の職掌の変化の傾向を捉える。続いて『万曆会典』以降における各清吏司の職掌を説明し、この傾向がどのように発展していくのか検討する。最後に、新設された三清吏司の性格を明らかにしたうえで、明末の財政管理の特徴を論じていく。

第一節、戸部清吏司の設立と人員構成

本節では十三清吏司に関する設立と人員構成を検討していく。

明朝建国の際、最高の中央官庁である中書省には四部のみが設置され、それぞれ錢穀、礼儀、刑名、营造を掌っていたが、洪武元（一三六八）年八月、中央官庁は四部から六部へ改組され、戸部はここで中央六部の一つとして成立したのである。⁽⁴⁾そして洪武五（一三七二）年六月、戸部及び戸部に所属する総部、度支部、金部、倉部の四官庁に関する職掌が定められた。⁽⁵⁾洪武十三（一三八〇）年正月、太祖は胡惟庸の獄を契機として中書省を廃止し、六部の地位と品級を上げた。⁽⁶⁾洪武二十三（一三九〇）年九月、戸部従来の四官庁である総部・度支部・金部・倉部は十二部に分けられた。⁽⁷⁾洪武二十九（一三九六）年五月、太祖は六部そのものと所属の下部官庁がともに「部」と呼ばれて区別し難いため、「部」を清吏司へ変更した。⁽⁸⁾こうして、洪武年間の時点で、戸部には、十二清吏司、即ち河南清吏司、北平清吏司、山東清吏司、山西清吏司、陝西清吏司、浙江清吏司、江西清吏司、湖広清吏司、広東清吏司、広西清吏司、四川清吏司、福建清吏司が成立したのである。そして永樂元（一四〇三）年二月、成祖が北平の地位を上げるべく北

平に関する官庁に対して一連の変更政策を行った際、北平清吏司は北京清吏司へと改められた。⁽⁹⁾ 永樂十八（一四二〇）年十一月、北京清吏司を廃止し、雲南、交趾、貴州三清吏司を設置した。⁽¹⁰⁾ 宣德十（一四三五）年五月には、交趾清吏司が廃止された。⁽¹¹⁾ ここで、戸部十三清吏司が完成したのである。

『正徳会典』によれば、十三清吏司は基本的にその名称に対応する各省を管理しており、また各清吏司はその事務の多寡に基づいて北直隸・南直隸に所属する府・衛の事務を分担した。⁽¹²⁾ こうした状況は万暦の張居正改革まで維持されていた。万暦三（一五七五）年に戸部尚書の王国光は各清吏司へ明確に責任を帰すべく、北直隸の府・州・衛を福建清吏司、南直隸の府・州・衛を四川清吏司に専掌させるとともに、注目すべきこととして、全国の塩課の管理を山東清吏司へ帰属させることを提案し、裁可を得た。⁽¹³⁾

以上、万暦初期までの戸部各清吏司の設置と沿革を概観してきた。戸部尚書王国光の戸部改革以前、各清吏司の管轄範囲は基本的に省の範囲という地理条件に基づいて明朝の財政任務を分担していた。北直隸・南直隸における府・州・衛はそれぞれの清吏司に雑然と分配されていた。また塩課、関税のような財政の専門項目は関わる省が単一の省ではないため、各清吏司に責任を持たせる際にはやや行政効率率が

悪かった。改革の後には、北直隸・南直隸の財政を福建清吏司、四川清吏司の管理としたばかりでなく、財政の専門項目をも特定の清吏司へ帰属させた。こうした改革は、諸々の清吏司の責任範囲を明らかにすると同時に国家財政管理の専門化を促進することになった。したがって、万暦三年の戸部改革は洪武二十三年に戸部が総部・度支部・金部・倉部から十二部に分けられて以来、最も重要な改革と言える。しかも同時期には戸部の官僚員数について大規模な改革が行われたのである。そこで以下より戸部人員の増減を検討しよう。

ここで作成した表一「『正徳会典』・『万暦会典』・『度支奏議』にみえる戸部構成の変化」では、『正徳会典』と『万暦会典』の「官制」、『度支奏議』「広東司」の崇禎二（一六二九）年の「題議裁汰本部冗員疏」により、異なる時期における戸部構成の変化を追った。⁽¹⁴⁾

『正徳会典』によれば、各清吏司の属員ははじめ郎中一員、員外郎一員、主事一員により構成されていたが、正徳年間までにやや増員されている。その過程で正統十四（一四四九）年、主事は十三人増加した。というのも同年九月にはエセンにより北京が包囲され、戸部は進士、知県から十三人を選抜し、北京各門を防衛する軍隊の食糧を管理せしめた。⁽¹⁵⁾ そして『正徳会典』によれば、土木の変の後、

表一 『正徳会典』・『万曆会典』・『度支奏議』にみえる戸部構成の変化

清吏司	主事	員外郎	郎中
浙江司	4→4→6	1→1→1	1→1→1
江西司	4→4→5	1→1→2	2→1→1
湖広司	4→4→4	1→1→1	1→1→2
陝西司	4→4→6	11→1→1	1→3→3
広東司	4→2→2	1→1→1	1→1→1
山東司	4→3→5	1→1→1	2→2→2
福建司	4→4→6	1→1→1	1→1→1
河南司	4→4→5	1→1→1	1→1→1
山西司	5→4→4	1→1→2	3→4→4
四川司	4→3→3	1→1→1	1→1→1
広西司	4→2→3	1→1→1	1→1→1
貴州司	4→3→3	1→1→1	1→3→3
雲南司	5→9→9	1→1→1	1→3→3

それぞれの項目の左偏は正徳4年(1509)、中央は万曆15年(1587)、右偏は崇禎2年(1629)のもの。

山東司主事一人、福建司主事一人が削減されたものの、他の十一人はすべて正徳年間まで保持された。
なお正徳年間から万曆初期にかけて、主事の人数は全体的にあまり変わらない。¹⁶⁾ただし郎中が六人増加したのは注目を要す。嘉靖年間、北元のアルタンは明朝に対する朝貢・互市の問題を巡って、頻繁に明朝に侵入し略奪を行った。これを背景に、これら郎中には「総理密雲糧儲」など具

体的な業務内容が課された。¹⁷⁾

しかもそれ以降、戸部の人員は徐々に増加していく。『度支奏議』には崇禎二年の時点の人員が明示されているわけだが、万曆初年と比べると、主事は十一人増えている。万曆四十六(一六一八)年、後金が明朝に対する戦端を開いてから明朝は対金戦争を続けていた。『熹宗実録』によれば、天啓年間(一六二一―一六二七)において、数多くの主事を地方に派遣した。¹⁸⁾これは正統十四年の土木の変における主事の大規模の増加と同様に、まさに業務の拡大によるものである。なお崇禎二(一六二九)年、戸部の官員には大規模に削減されている。これは業務の減少によるものではなく、膨大な軍事費を捻出するために少しでも支出を削減すべくなされたものである。¹⁹⁾というのも、新設されたもののうち遼寧にあった寧遠餉司と東江餉司は、第三節で詳述する対金戦争のための新税である新餉を受領する最前線にあり財源を効率的に管理するために保留されているのである。²⁰⁾

以上、本節で『会典』と『実録』の記載により、明代を通じて十三清吏司の設置とその人員の沿革を概略に述べた。戸部においては、主事・郎中の規模が軍事活動の頻発によって拡大してきた。とりわけ、増設された郎中の事例から考えると、嘉靖年間以降の頻繁な軍事活動は財政管理

の専門化をも促したことが窺えるのである。

第二節、崇禎年間における清吏司の職掌の実態

第二節では戸部の財政管理が専門化していく傾向を概略した。次いで本節では『度支奏議』より、この傾向が明末に至ると、如何に発展していくか分析してみよう。まず『度支奏議』とその編者の畢自巖を概略的に紹介する。

畢自巖は字景曾、山東濟南府淄川県の出身、万曆二十（一五九二）年の進士である。南直隸松江府推官、刑部主事、工部員外郎の後、淮徐兵備道に就き、その後には万曆四十（一六二二）年から四十八（一六二〇）年の八年を西北の辺境で勤務した。そして泰昌元（一六二〇）年太僕寺卿に任命され、翌年の天啓元年、初代天津巡撫となり、天啓六（一六二六）年まで天津で遼東の事務を担当していた。その後、南京都察院右僉都御史を経て、南京戸部尚書となった。しかし、在任期間中に魏忠賢と対立したため、健康問題を理由として辞任することとなった。そして魏忠賢誅殺後の崇禎元（一六二八）年には戸部尚書となり、崇禎六（一六三三）年まで中央政府の財政を掌っていた。畢自巖は国家の田賦を整理する『賦役全書』の作成を志したものの完成できず、在任期間の戸部の公文書を取り纏め『度支

奏議』を編纂した。『度支奏議』は『賦役全書』の不完全な草稿にあたるのである。²²⁾

この『度支奏議』は畢自巖が戸部尚書として上奏した「堂稿」（表二冒頭）のほか、各清吏司がそれぞれの業務内容に応じて上奏した文書収める「浙江司」などにより構成される。なお編目には前述の十三清吏司の他に「新餉司」、「冊庫司」、「辺餉司」の三清吏司の文書が見られる。これらはみな泰昌・天啓年間に設置された清吏司で詳細な分析が必要であるため、第三節で論じることとする。その上奏の内容により各清吏司の職掌を判断し、表二を作成した。

総論である「堂稿」、後述する「新餉司」、「冊庫司」、「辺餉司」は一先ず措き、旧来の十三清吏司について、その数値を統計的に分析すると、以下の三点を指摘することができる。

① 担当地域の事務と全国財源の管理の関係

「各司」に収められる上奏文で兩京十三省の当地と関係するものは相対的に少ない。「浙江司」から「貴州司」まで、管轄区域の事務と関係する上奏文は二百九十八本が存在するが、それらは全上奏文の四十%を占めるに過ぎない。そして本省の事務の比率が高い「福建司」、「四川司」を除外すれば、当地の事務と関係する上奏文は一五五本のみで、

表二 上奏文の分類

	「巻数」本数	本省の事務	専門的項目	その他
堂稿	「20」 352			
浙江司	「1」 4	13 (92.9%)	0	1
江西司	「1」 4	4 (100%)	0	0
湖広司	「2」 31	31 (100%)	0	0
福建司	「4」 67	福建 10 (14.9%)、 北直隸 57 (85.1%)	0	0
山東司	「7」 122	山東 8 (6.6%)、 遼東 6 (4.9%)	塩課 95 (77.9%)	13
山西司	「2」 31	27 (87.1%)	捐納 4 (12.9%)	0
河南司	「1」 9	9 (100%)	0	0
陝西司	「4」 56	46 (82.5%)	茶法 6 (10.7%)、 賦役全書 4 (7.1%)	0
四川司	「5」 67	四川 8 (11.9%)、 南直隸 59 (88.1%)	0	0
広東司	「1」 9	2 (22.2%)	戸部内の人事 6 (66.7%)	1
広西司	「4」 51	2 (3.9%)	倉・場の管理 49 (96.1%)	0
雲南司	「17」 241	4 (1.7%)	漕運 237 (95.0%)	8
貴州司	「2」 29	12 (41.4%)	鈔関 17 (58.6%)	0
新餉司	「36」 699	0	新 餉 の 管 理 699 (100%)	0
冊庫	「1」 8	0	全国収支・滞納 状況 3 (37.5%)	5
辺餉司	「11」 167	0	旧 餉 の 管 理 167 (100%)	0
総計	「119」 1957			

括弧内は比率。「本省の事務」とは省内の財政及び『万暦会典』で規定される地域の財政を指す。「専門的項目」とは捐納など全国規模の財源の管理を指す。「その他」には上記両者として分類し難いものである。

僅か全体の二十六%を占めるに過ぎない。一方、塩政、漕運、関税、倉・場などという財政上の専門項目に関する上奏文は数多い。例えば「雲南司」に収められる上奏文はほぼ漕運のことを述べている。収録された上奏文の数は「新

餉司」、「堂稿」に続いて、三番目であり、二三七本に達している。「山東司」に所収される塩課の上奏文は七八%を占めている。「広西司」の場合は、倉・場の管理に関する上奏文が四十九本あるが、「広西司」の全体の九六%を占

めている。

したがって、地名が名づけられた各清吏司は、各地方の税金に関する事務を担当するというより、それぞれに割り振られた財政項目の処理こそが主要対象となっていたと言えよう。

② 戸部が重視していた財政問題

「各司」に収録されるそれぞれの分類の上奏文の数と内容によって、当時の財政的問題やその原因についてある程度判断できる。両京十三省の中で、管轄区域の事務のみに関する上奏文がやや多いのは「湖広司」である。ただし「湖広司」で七割を超えた上奏文（三十一本中の二十一本）は湖広省における王府贍田のことである。ここには恐らく以下の二つの理由がある。一つは明末（崇禎年間）の時点では、明朝の各省の中で湖広省に分封された藩王が最も多く、持つ土地面積も最も広かったことである。もう一つは、恵王、桂王が湖広省に移封されたばかりであったことである。²⁵ 王府に関する類似したケースは「福建司」、及び「山東司」²⁶でも発見することができる。明末にいたると、藩王に支給される俸禄は財政支出全体から見れば大きな割合を占めるものでは無かったであろうが、藩王、外戚などは臣下たる者が安易に処置できない難題であったことだろう。²⁷

福建清吏司は北直隸の事務を担当している。北京は国家の辺境に程近く、また国家の首都でもあったため、明末にも数度にわたって清朝の侵入を受けた。²⁸ ここで北直隸が清朝により蹂躪されたため、こうした地方の税金免除の検討に関する上奏文が「福建司」に多く収録された。

一方、南直隸に触れた上奏文が多いのは、両京の一つとしての南京の政治的地位に起因するというよりも、むしろ地域の果たす経済的な役割が理由であろう。南直隸は明朝の漕運の中で、非常に大きな役割を果たしていたからである。明朝の漕運の責任者である漕運総督はもとと鳳陽巡撫を兼任する。²⁹ その上、漕運を形成する重要な要素であった南糧と白糧に関する問題も「四川司」の中に頻繁に出現する。³⁰ 後述するが漕運はまことに重要であり、「四川司」に南直隸に関する上奏文が数多いのは怪しむに足りない。陝西省と山西省の事務に触れる上奏文が多いのは、北直隸の状況と同様に、陝西省と山西省が明朝の辺境線に位置し、九辺十三鎮に属したためであろう。

漕運については当時、戸部尚書の畢自嚴が軍事費と同様に極めて重視していたことが確認できる。³¹ 収録される上奏文の数と畢自嚴の認識から、漕運が国家財政の中に非常に重要な位置を占めていたことは疑いない。また畢自嚴の認識では塩税も重要であり、特に両淮の塩税が財政上の重要

な項目であった。⁽³²⁾ 塩税は土地税に続いて、国家財政収入の中で大きな割合を占めている。⁽³³⁾ また広西清吏司が掌る北直隸の倉・場に注意しなければならない。場の一種である草場の管理は馬政と深く関係しており、馬政は軍政と深く関係する。しかも、明末に入ると、膨大な兵餉を支えるため、軍馬の草料である巡青銀は何回も流用された。⁽³⁴⁾ 収録される四十九本の上奏文から、国家における倉・場の重要性を知ることができるのである。

要するに、上奏文の数においても、内容においても、戸部が各地方のそれぞれの財政事務より、財政の専門的項目の管理を重視していたと言い得るのである。

③ 『万曆会典』に出現しなかった職掌

表二の内容と『万曆会典』が記載する戸部清吏司の職掌を比較すると、『会典』には捐納、茶法、賦役全書の制定、戸部内の人事に関する業務を見出すことはできない。捐納とは売位売官制度のことである。前近代の中国では、自然災害や軍事行動という突発的な需要に対して、その財政構造のため弾力的な増税が難しく、捐納政策を行ってきた。⁽³⁵⁾ 崇禎年間においても、東北部における後金の進出や反乱の平定のための軍事費が財政を圧迫し、政府にとって捐納は重要な財政収入確保の手段であった。そのため、捐納政策

は重要な財政収入の手段の一つとなり、明末には重要視された。そして捐納政策に対する管理を個別に扱う清吏司として山西清吏司が割り当てられた。

次いで茶法について述べよう。先行研究、及び『万曆会典』においては、陝西清吏司が茶法を管理することは全く述べられない。⁽³⁶⁾ しかし『度支奏議』では、兵部尚書の梁延棟が茶法は陝西清吏司の管轄であると明言しており、陝西清吏司が茶法を管理していたことが確認できるのである。⁽³⁷⁾

また『度支奏議』に収められる多くの上奏文の中で、ただ「陝西司」にのみ賦役全書の編纂に関する上奏文がある。

『度支奏議』の「広東司」の四本は戸部の人事案の調整である。⁽³⁸⁾ また「堂稿」には、広東清吏司の調査により、出張中の戸部属員を帰任させる記事がある。⁽³⁹⁾ しかも『万曆会典』や明中期の政書『皇明條法事類纂』には広東清吏司の人事担当記事は見られない。つまり万曆以降、広東清吏司が部内の人事案の調整を掌るようになった可能性がある。⁽⁴⁰⁾ 山西清吏司、陝西清吏司には元々人数が多いため、余裕をもって新任務が担当できたかもしれないが、広東清吏司には、郎中も一人、員外郎も一人しか配置されていない。⁽⁴¹⁾ しかし、明末各地における税金の滞納状況を調べると、広東省に割り当てた新餉・旧餉は少なく、さらに滞納問題がほとんど生じていない。⁽⁴²⁾ したがって、業務内容の多寡により

新任務が広東清吏司へと割り振られた可能性すらありえよう。

弘治七（一四九四）年十二月を下限とする『皇明條法事類纂』『戸部類』（卷十二・卷二十）には、山東清吏司が塩政を担当する事例こそ存在するものの、管見のかぎり上述したような茶法や人事関係などへの関与は現れない。したがって、こうした職掌は明朝後期より漸次出現した可能性がある。

以上、十三清吏司が万暦前期以降、業務の内容、及び重視した方面を分析した上で、職掌の発展を検討した。第一節で述べたように、正徳以降の郎中の増加は、財政項目管理の専門化の進行を表していた。万暦初期、戸部尚書王国光の戸部改革はその専門化をさらに促進した。明末に捐納や人事のような新職掌が出現したことを合わせ考えると、明代の戸部における業務の分担はますます専門化していく傾向にあっただろう。これから第三節で述べる新餉司、冊庫司、辺餉司の事例をみれば、そのような傾向はより一層明らかとなる。

第三節、新餉司、冊庫司、辺餉司の出現

明末に入ると、遼東軍事に対応するため、三つの清吏司

が続々と新設された。泰昌元年（一六二〇年）九月、戸部尚書の李汝華の申請により、遼餉事務を専門に処理するた新餉司が創立された。⁽⁴⁴⁾ また天啓元（一六二一）年十二月、十三清吏司の金銭・物資を総体的に管理させるため、冊庫司が設置された。⁽⁴⁵⁾ そして天啓七（一六二七）年八月、辺餉を監督する専門官が設置され、辺餉司が創られた。⁽⁴⁶⁾ こうした三司の具体的な業務について、これから検討する。新餉と辺餉にはやや複雑な関係があるため、まず冊庫司を分析する。

『度支奏議』『冊庫』は一卷八本の上奏文を収めている。冊庫司は全稱を冊庫山西清吏司といい、『実録』によれば、十三清吏司の歳入状況を管理している。⁽⁴⁷⁾ また崇禎二年五月一日に提出された上奏文によれば、冊庫司は各省からの歳入状況のみならず、「省直之完欠」⁽⁴⁸⁾（全国の税金の徴収状況）をも管理していたことが確認できる。「冊庫」に収められる上奏文は少ないが、それらはほとんど全国各地の財政項目と関係する。⁽⁴⁹⁾ しかも天啓年間の戸部尚書李起元の上奏文によれば、冊庫司は税金の徴収状況のみならず、税金の徴収に対する考成法による査定も管理していた。⁽⁵⁰⁾ したがって、冊庫司は戸部の中の会計部局といった存在であり、しかも地方官の人事査定にも関わる重要な機関であったことが分かるのである。

新餉司は全称を専理新餉山東清吏司という。⁽⁵¹⁾「新餉司」に収録される上奏文は各司の中で最多であり、すべて新餉の徴収や使用、或いは対金戦争の軍事費に関するものである。辺餉司は全称が判明しないが、新餉以外の九辺十三鎮の兵餉を担当することを確認できる。

前述したように、新餉司は新餉を管理し、辺餉司はそれ以外の辺鎮兵餉を管理する。それでは新餉、辺餉、及び「度支奏議」に頻出する旧餉、遼餉、京運年例などの兵餉とは具体的に何を指すのであろうか。既存の研究を検討しつつ解明していく。

まず、京運年例銀と民運銀を確認しよう。京運年例銀とは、毎年、戸部により管理される太倉、及び内帑に所属する内承運庫から、辺鎮に分け与えられる軍費である。京運年例銀は正統年間以前には現物を中心としたので、京運年例と呼ばれ、正統年間以後に銀の徴収に変更されたため、京運年例銀と呼ばれるようになった。民運銀とは華北各地から辺鎮へ直接輸送される様々な現物であり、京運年例銀のように、正統年間以降、一部の現物は銀に換算して納入することを業務づけられ、それが「民運折色銀」と呼ばれることとなった。京運年例銀、民運銀はいずれも国家の正額の収支である。⁽⁵²⁾

研究者によって見解が相異するのは旧餉、新餉、遼餉で

ある。李華彦は、遼餉は旧餉と新餉により構成され、旧餉は万暦末期、九厘銀を追加する前の土地税の加派を指すと述べた。⁽⁵³⁾そして、李氏は旧餉、新餉、京運年例はそれぞれ独立するものと考えた。⁽⁵⁴⁾朱慶永は、泰昌元（一六二〇）年「新餉庫」が創立されて太倉庫から独立して、遼餉を専管するようになって以降、嘉靖三十年代以来全辺鎮に対して支給されていた兵餉が旧餉と呼ばれるようになったと述べた。⁽⁵⁵⁾林美玲は、万暦末期に行なわれた土地税の加派（即ち九厘銀）が遼餉であり、遼餉はまた新餉と呼ばれ、新餉に對する旧餉が辺餉であると述べた。⁽⁵⁶⁾ただし、辺餉の構成については具体的に言及していない。吉尾寛は、遼餉は新餉とも呼ばれ、土地の加派銀をはじめとして塩課・関税の加派銀などの銀両から構成され、対金戦争のため支給されていたものと述べ、また旧餉は主に京運年例銀、その他太倉庫に徴解される塩税銀・関税銀などから構成されて支給されたものと解釈した。⁽⁵⁷⁾

『度支奏議』の多くの記載、林氏の研究、吉尾氏の研究からすれば、明末における遼餉は新餉であり、またそこには万暦末期の土地税の加派だけではなく、塩税、関税などの加派も含まれるものである。

そして「登答方関院葡密永三協兵餉疏」（「辺餉司」巻一、五冊・四二頁）の記載からは、当時の官僚たちが新餉、旧

餉をどのような財源として認識していたのか知ることができる。

関臣之言曰旧餉、則京運民運是已。……関臣之言曰新餉、則地畝加派是已。……自遼事初熾、徵調四出、用餉如流。加派一議、始於万曆四十六年、通加至每畝九厘則始於万曆四十八年也。

以上の史料からすれば、辺鎮の官僚は、旧餉とは京運年例銀と民運銀を指し、新餉とは、万曆四十六（一六一八）年以降、行われた土地税の加派を指すことがわかる。

また旧餉について、「議祛餉司宿蠹十款疏」（「堂稿」巻七、一冊・二六七頁）には、

計開。一曰痛革京運庫折之弊。九辺軍餉除塩兌民運外、什七仰給京運。……二曰力滌民運出納之規。各鎮餉銀、除京運外、多頼民運。

とある。また「旧餉告匱辺鎮呼庚疏」（「堂稿」巻一、一冊・二八頁）には、

一曰覈民運之逋欠。国初九辺主客兵餉俱有各省□州□民運以資供億、後來間發京帑、不過一時權宜之計、□濟急需。若民運一分之充足、即京運一分之節省。

とある。以上の史料からは九辺軍餉、京運年例銀、民運銀という三者の関係を窺え、旧餉は主に京運年例銀と民運銀により構成されたことがわかる。

また新餉司と辺餉司の職掌について、「登答方関院薊密永三協兵餉疏」（「辺餉司」巻一、五冊・四二頁）には、

臣部所發者、旧餉則属辺餉司劄付、旧庫有巡視科院在焉。新餉則属新餉司劄付、新庫有督餉御史在焉。

とある。また「覆薊鎮餉司呂一奏收放餉銀數目疏」（「貴州司」巻一、八冊・一五九頁）には、

本司（貴州清吏司）以旧餉係辺餉司所發、新餉係新餉司所發……。

とある。要するに、新餉司は主に新餉（遼餉）、即ち万曆四十六年以降に行われた土地税の加派を主として、塩課・関税などの加派銀も含まれる税金に関する収支を掌っている。また辺餉司は主に辺餉、即ち、京運年例銀と民運銀を主として、太倉庫（即ち新餉を預ける新庫に對する旧庫）に徵解される塩課銀・関税銀も含まれる税金に関する収支を掌っている。

以上、新餉司、辺餉司、冊庫司の職掌に関して検討してきたが、この三清吏司は戸部の中にどのように位置づけることができるだろうか。つまり三清吏司は従来の十三清吏司の下で運営するか、それとも全十六清吏司として存在するかという問題である。まず冊庫は『熹宗実録』の記載から確認できる。『実録』巻八十六・天啓七年七月戊寅条には、

戊寅。戸部尚書郭允厚疏陳八款、大略為欲覈辺餉当嚴

冊庫之職掌、欲足京糧当除流動之名目。十三司各有分職、然所轄者止一省耳。有此省錢糧而為彼省用者、不与聞也。有本司止存入數、而為別司之出數者、不与聞也。有此項錢糧參罰而別項之応罰応開、不与聞也。一部之中、藩籬稍隔、呼吸若不相通、惟責成于冊庫、為提綱挈領之道。応將郎中劉応遇、新創各冊、永遠遵守、更相交代十三司並銀庫、每月將月会冊、実実呈堂、送庫註冊、必使無事不有冊、無冊不用印、一有稽查、信手拈來、靡不明悉、外則杜各解侵欺興販之弊、内則杜攬保假印之姦、有一不備、有一不真、責在理庫之官、即以冊為考覈之殿最也。至于錢糧所以稽遲有司可以藉口者、則流動不一、四字害之耳。……職此之故、謂宜責成冊庫。將天啓六年、奉旨、已行之歲会冊、邇至元年、合六年內總撤、併五年再聞應增之額、逐省細加商確較數歲之中、以為嘗預派勘合應為定額、寧稍贏余、毋使匱歟、寧流動于太倉、毋流動于徵収、酌成會計全冊、通行海内、可以歷千百年而不弊。仍刊刻成書、送吏戶二科、並兗省直諸司、歲歲行之。庶部司有可摸索、守令有可秉成、吏書無可顛倒。此一勞永逸之道也。因留冊庫郎中劉応遇、以新陞參議職銜、仍管冊庫、以終其事。得旨、……俱依議。……

とある。戸部は嚴密な財政管理を求めため、十三清吏司

にそれぞれの各省に関する財政状況の報告書を纏め、月一回その報告書を提出させたくえて、冊庫司へ送り登録する。報告書の内容により、税金の徴収を担当する官員を「考成」(査定)する。「十三清吏司の報告↓戸部へ提出↓冊庫司の登録↓官員を評定」というルートから考えてみれば、冊庫司は十三清吏司から独立している部局ということだけではなく、財源管理の十三清吏司から官僚査定の吏部までの各所とも非常に深い関係があることが分かる。

続いて新餉司と辺餉司を分析していく。『度支奏議』に収められる上奏文の中では、「新餉司」が三十六卷、六百九十九本を占め、畢自巖が戸部尚書として提出した「堂稿」(二十卷、三百五十二本)の二倍以上に達している。しかも、元々の内容はこれにとどまらず、畢自巖は「新餉司」を編纂する際に二割から三割におよぶ内容を削除したと述べている。⁵⁹⁾ 所収される上奏文の数量から、当時戸部は新餉司を非常に重視していたことが分かる。

次に新餉司の設立を再検討しよう。新餉司は泰昌元年(一六二〇年)九月に設立されたが、万曆四十六年(一六一八年)六月には戸部はすでに新餉司の設立を検討し始めていた。戸部は、六月四日に兵餉の徴解を監督する官員を増設し、郎中の肩書を与えることを提案した。⁶⁰⁾ 続いて、同月二十日、主事潘宗顔を戸部山東司郎中専理新餉とした。た

だし新餉の責任者に郎中の肩書を与えたが、関防（印鑑）を鑄造していなかったようであり、泰昌元年八月十七日、戸部は関防の鑄造を再申請し、九月十一日に「戸部專理新餉」の関防を郎中楊嗣昌へ与え、二十日、新餉司が成立した。楊嗣昌の上奏文からは、ここで新設された新餉司は責任者が楊嗣昌一人しかないことを確認できる。しかし、崇禎年間に入ると、十人は新餉司に勤めており、その中に郎中が三人、主事が一人いる。『度支奏議』『新餉司序』（二冊・二百八十五頁）には、

今十人而不佞共事其四、歲月滋久、薪膽相鄰、如蜀之范子鉉、毫之薛子邦瑞、楚之劉子鎬、上谷之張子鵬翀、皆相与寒沾暑濕……。

とある。曾美芳氏の研究によれば、当時、范鉉、薛邦瑞、張鵬翀は郎中であり、劉鎬は主事である。ここからは新餉司が誕生したのち、責任者の地位が上昇し、権力の象徴たる関防が与えられ、郎中の人数が拡大し、新餉司の地位がますます重要になっていったことがわかる。また辺餉司にも新餉司と同様に、人数の拡大を確認できるのである。

以上、戸部内の新餉司に対する認識を検討してきた。ついで戸部以外の他官庁の場合を述べる。遼東経略袁応泰の認識では、戸部の新餉司は他部の清吏司と並置される存在である。崇禎三年、崇禎帝は吏部、都察院に以下のように

述べた。「今後戸部侍郎は一人が新餉の責任、もう一人が辺餉の責任を持つべきである」と。⁽⁸⁵⁾新餉司の新餉管理、辺餉司の辺餉管理は前文の分析により確実であるが、ただ『崇禎長編』の記載からは、侍郎が新餉司、辺餉司に対して直接的に責任を持つかどうかは即断できない。とはいえ新餉司、辺餉司については皇帝、及び他官庁の認識から重要な位置であったことを確認できる。したがって、泰昌・天啓・崇禎年間における新餉司の発展、及び朝廷の新餉司・辺餉司に対する認識からすれば、新餉司・辺餉司は従来の十三清吏司と比べて、非常に重要な地位を有していたと思われる。しかもさらに崇禎中期以降には、前述の遼餉に続き、さらなる付加税の勦餉や練餉の徴収を開始した。それぞれ勦餉は陸続と発生する農民反乱を平定するための軍事費であり、練餉は国境ラインにおいて全面的に清兵の侵入を防衛するための軍事費である。そして練餉には辺餉や新餉と同様に清吏司の設置が確認されるのである。⁽⁸⁶⁾史料の限界によつて練餉司などについての状況はまだ明らかにはし得ない。しかし新餉司・冊庫司・辺餉司についての本稿での検討を通じて、戸部の部局が洪武・永樂以来の十三清吏司という枠組みを超え、特定財源を専門とする清吏司を陸続と誕生させるに至ったと言い得よう。

終わりに

第二節では明代の戸部における国所以来の所謂十三清吏司の設立過程と人員構成を検討してきた。また第二節では万曆初期以降の戸部に現れた新職掌、及び当時戸部が重視していた財政問題を述べた。そして第三節では泰昌・天啓年間に新設された新餉司、冊庫司、辺餉司の職掌とその地位を論じた。以上の分析によると、業務の多忙による主事の増加、及び業務専門化的性格を持つ郎中の増加という傾向は明代を通じて、持続的に表れていた。とりわけ明末に至ると、遼餉即ち東北部における清朝に対する防衛の軍事支出は明朝財政の最重要性を持ち、国家が行なったすべての財政政策は遼餉を中心として運営された。こうした膨大な軍事支出にうまく対応できるように、財源は稠密に、また龐大になるよう模索され、戸部による財政管理の効率化が必要とされるようになった。こうした情勢こそが戸部の部局の拡大そしてそれぞれの清吏司での財政管理の専門化を促したのである。実際吉尾寛は「堂稿」に基づき財政データを処理した際に緻密で実務的な方法こそが明末の特徴の一つであると述べている。^① 本稿で述べた戸部の職掌の変容はそのような明末の特徴の発露であったと言える。総じて言えば、万曆前期以降、戸部の各清吏司は担当

地域の財政本省財政ほかに専門的財政項目も分担しており、そのうえこの財政項目は時期が進むにつれてより細密化し、また専門化していった。

なお明朝戸部の発展の特徴を明らかにしてきたが、これから清朝の戸部についても一瞥しておきたい。清朝に入つて以降、中国本土（China proper）の行政区分は明朝の両京十三省から、大きく変化した。戸部清吏司の構成については劇的な変化はみられない。この変化とは、ただ四川清吏司の南直隸（清朝初期の江南省）の事務をやめ、その事務を清朝で新しく創立された江南清吏司に担当させたことに過ぎない。各清吏司の職掌から見ると、財政項目の管理は明朝（万曆時点）よりさらに専門化している。ただし、それはあくまで明末の職掌変容をうけたものであった。というのも陝西清吏司が国家的茶法を管理したこと、及び広東清吏司が戸部における漢族官吏の人事関係を管理することとは『光緒会典』に明確な記載があるのである。^② この二つの職掌は『万曆会典』には記載がなく、明末の戸部にはじめて見出すことができる。また、明末には山西清吏司が捐納事務を担当していたのであるが、『光緒会典』では各清吏司の職掌に捐納をみるできない。しかし戸部の項目には捐納房なる部局があり、捐納のことを専掌させたことが記載されている。^③ また清朝が中国本土へ進出した後、

万曆四十六年以降の加派は名目上一切撤廃されたが、遼餉や練餉は中国本土の統一戦争のため、なお徴収されつづけた。²⁴以上に述べた現象、とりわけ広東清吏司の職掌や捐納房の出現が明末の戸部と如何なる関係を持つか、また清初では如何にして遼餉・練餉を管理していたのか、今後の課題としたい。

注

(1) 例えば、内閣制度については高橋亨「明代永樂期内閣官の性格について」(『歴史』一一六、二〇一一年四月)、「明代内閣職掌形成過程の研究」(『史林』九五(三)、二〇一二年五月)。都察院制度については小川尚「明代都察院体制の研究」(汲古書院、二〇〇四年十月)、総督・巡撫制度については辻原明穂「明代巡撫の地方常駐化とその意味」(『アジア史学論集』六、二〇一三年四月)にそれぞれ分野の研究が概略されている。また大野晃嗣は「最近の明代官僚制研究」(『中国史学』十三、二〇〇三年十二月)で二〇〇三年以前の明代官僚制度の研究を整理した。

(2) 王天有『明代国家機構研究』(北京大学出版社、一九九二年九月)。黄阿明『明代戸部機構及其運作——以一六世紀為中心』(華東師範大学に提出した修士論文、二〇〇五年、中国国家知識基礎設施(CNKI)から入手)。(3) ほか戸部政書として、趙世卿『司農奏議』十四卷(『続修四庫全書』「史部」第四八〇冊所収、一九九五年)、汪応

蛟『計部奏疏』四卷(『続修四庫全書』第四八〇冊に所収、一九九五年)、李起元『計部奏疏』十卷(『中国文献珍本叢書』に所収、全国図書館文献縮微複製中心、二〇〇七年六月)、倪元璐『倪文貞奏疏』卷六(卷十二(『四庫全書』「集部」第一二九七冊に所収、一九八六年)が存在する。本稿では『度支奏議』の補足として利用していく。

(4) 『太祖実録』卷三十四、洪武元年八月丁丑条、「中書省奏定六部官制。部設尚書正三品、侍郎正四品、郎中正五品、員外郎正六品、主事正七品。先是、中書省惟設四部、以掌錢穀、礼儀、刑名、营造之務。上乃命李善長等議建六部、以分理庶務。至是、乃定置吏、戸、礼、兵、刑、工六部之官。」

(5) 『太祖実録』卷七十四、洪武五年六月癸巳条、「定六部職掌、歲終考績、以行黜陟。吏部掌天下官吏選法、封勲、考課之政……戸部掌天下戸口、田土、貢賦、經費、錢貨之政。其属有四、一曰総部、掌天下戸口、田土、貢賦、水旱、災傷。二曰度支部、掌管考校、賞賜、禄秩。三曰金部、掌課程、市舶、庫藏、錢帛、茶塩。四曰倉部、掌漕運、軍儲、出納、料量……各部設郎中、員外郎、主事分掌其事、而以尚書、侍郎総其政務。」

(6) 『太祖実録』卷一百二十九、洪武十三年正月癸卯条、「罷中書省陞六部、改大都督府為五軍都督府」。また同卷甲辰条、「定六部、御史台等官品秩。六部尚書正二品、侍郎正三品、郎中正五品、員外郎從五品。御史台左右中丞正二品、左右侍御史正四品。在外承宣布政使正三品、左右参政從三品。

提刑按察使正四品、副使從四品、僉事正五品。都轉運塩使正四品、副使從四品。」

- (7) 『太祖実録』卷二百四、洪武二十三年九月戊戌条、「分戸部四部為十二部、曰河南、曰北平、曰山東、曰山西、曰陝西、曰浙江、曰江西、曰湖広、曰広東、曰広西、曰四川、曰福建。每部分領一布政司、及直隸府州錢穀、金帛之事。其雲南則以四川部兼領焉。又置照磨檢校各一人、以稽文書出入之數、而程督之更。鑄印十二文曰戸部某部印。每部置郎中、員外各一人、主事二人。」

- (8) 『太祖実録』卷二百四十六、洪武二十九年八月庚戌条、「改六部諸屬部為清吏司。上以六部之屬皆稱部混而無別、故欲易其名。因寓飭勵之意、凡諸屬部皆曰清吏司。更其名者十有三。吏部選部曰文選司、封部曰驗封司、勲部曰稽勲。礼部儀部曰儀制、祠部曰祠祭、膳部曰精膳。兵部司馬部曰武選、駕部曰車駕、庫部曰武庫。工部營部曰營繕、屯部曰屯田、水部曰都水、虞部曰虞衡。其戸部十二部及吏部考功、礼部主客、兵部職方名皆仍旧、俱改部為清吏司。」

- (9) 『太宗実録』卷十七、永樂元年二月庚戌条、「設北京留守、行後軍都督府、北京行部、北京国子監。改北平府為順天府、北平行太僕寺為北京行太僕寺……順天府、北京行太僕寺官制如旧。革北平布政司、按察司及北平都司等衙門。刑部、戸部之北平清吏司俱改北京清吏司、都察院北平道改北京道。」

- (10) 『正徳会典』(卷十六、戸部一)及び『万曆会典』(卷二、京官)は永樂十九年と記載しているが、『明史』(卷

七十二、職官一、戸部条)は、永樂十八年と記録している。ただし『太宗実録』(卷三二、永樂十八年十一月壬午条)

- には、「革北京刑部並所屬吏、戸、礼、兵、刑、工六曹清吏司、照磨所、司獄司、其属官俱俱調用。及革行在戸部、刑部并南京戸部、刑部之北京清吏司、行在都察院并南京都察院之北京道。刑部增置雲南、交趾、貴州三司。」とある。この条の前半で、「戸部」、「刑部」がともに登場することから考えてみれば、「刑部増置雲南、交趾、貴州三司」の前に、「戸部」の二字を落とした可能性が考えられよう。したがって、ここでは『明史』の繫年を採用する。

- (11) 『英宗実録』卷五、宣德十年五月庚辰条、「革兩京都察院交趾道并戸部、刑部交趾司。」

- (12) 『正徳会典』卷十六、「戸部一」。例えば、河南清吏司は南直隸の松江府、鳳陽府を分担する。江西清吏司は応天府を分担する。雲南清吏司は北直隸の順天府を分担する。

- (13) 『神宗実録』卷四十三、万曆三十年十月庚寅条には「戸部尚書王国光題、為婦併職掌、以一法守、以便責成。議欲以北直隸府・州・衛婦併于福建司。南直隸府・州・衛婦于四川司。各辺中外並之山東司。臨徳諸倉併之雲南司。御馬・象房・二十四馬房倉婦于広西司。崇文・許墅・河西・臨清各関稅婦于貴州司。一方同司、一事專管、則総核者有所責成、承行者庶無推諉、可久之規也。奉旨。這各司職務既分属明白、都依擬、著永為遵守。你每堂上官還要精核責成、毋容怠玩曠職」とある。また『明史』卷二二五「王国光伝」に

は「天下錢穀散隸諸司、国光請帑併責成、畿輔府州県帰福建司、南畿帰四川司、塩課帰山東司、関稅帰貴州司、淮、徐、臨、德諸倉帑雲南司、御馬、象房及二十四馬房芻料帰広西司。遂為定制」とある。「塩課帰山東司」は『明史』のみに見られるが、注43で後述するように『皇明条法事類纂』の内容から考えれば、遅くとも弘治元年（一四八八）には山東清吏司が塩課を掌っている。恐らく万暦三年より山東清吏司の塩課に対する管理を明文化したのだろう。

(14) 『正徳年間にについては『正徳会典』卷三「官制一」「戸部」、万暦年間については『万暦会典』卷二「戸部」、崇禎年間については、「題議裁汰本部冗員疏」（『度支奏議』「広東司」卷一、六冊・五五三頁）を参照。これは崇禎二年四月十三日、戸部の人員を削減しようとした上奏文である。この上奏文の内容により、崇禎二年四月前後の戸部人員の構成がわかる。戸部は人員を削減した後、寧遠餉司の郎中、東江餉司の郎中を除き、すべて『万暦会典』に記載される規定に戻した。

(15) 『英宗実録』卷一八四、正統十四年十月甲子条、「擢進士鄭和、趙蕃、楊紹、江真、知鼎、楊寿、劉豫、張禎、董英、監生馮敬、丘遠、韓文、陸禎、陳安俱為戸部主事、專理京師各門、預備糧儲。以虜寇臨城、戸部奏請添置故也」。

(16) 『万暦会典』卷二、「戸部」。『神宗実録』卷一〇八、万暦九年正月辛未条、「吏部查議裁革在京各衙門官。戸部浙江、湖広、河南、福建、広東、広西司主事各一員。江西、雲南、山東、四川、山西、貴州司各二員。陝西司三員」、及び『神

宗実録』卷一三九、万暦十一年七月乙酉条「命戸部浙江司、江西司、福建司、山東司、山西司、河南司、四川司、陝西司、雲南司、貴州司、礼部儀制司、祠祭司、主客司、兵部武選司、職方司各復設主事一員」で確認できる。

(17) 『万暦会典』卷二、「戸部」条、「嘉靖三十八年、添設雲南司郎中一員、管理糧運。貴州司郎中一員、総理密雲糧儲。四十三年、添設貴州司郎中一員、総理永平糧儲。隆慶六年、添設雲南司郎中一員、東官庁收放錢糧」。

(18) 例えば、『熹宗実録』卷十一、天啓元年六月壬辰条「差戸部江西司主事康爾韞管河西鈔関」、卷十二、天啓元年七月庚戌条「差戸部陝西司主事丁魁楚天津管糧」、卷十四、天啓元年九月癸亥条「差戸部山西司郎中霍允猷管薊州糧儲」、卷二十六、天啓二年九月丁巳条「差戸部江西司郎中周之太永平管糧。四川司主事涂喬芳管潯墅鈔関」。このような例は多く存在している。

(19) 「題覆會議邊餉議單十二款」（『度支奏議』「堂稿」卷五、一冊・二二一頁）において、戸部が軍事費を提供するため、土地税の加派を除き、多くの対策を行ったことを確認できる。なお、具体的な対策については、李華彦『財之時者——戸部尚書畢自嚴与晚明财税（一六二八—一六三三）』第五章「畢自嚴的財經思維和規画」（王明蓀主編『古代歴史文化研究輯刊』八編、第十六冊、花木蘭文化出版社、二〇一二年九月）を参照。

(20) 寧遠・東江両餉司は後文で検討する新餉司との関係を示す史料は見つからなかったが、『崇禎長編』卷十、崇禎元

年六月壬子には、「専理東江餉務戸部員外郎黄中色覈東江兵三万有奇、具疏上聞」とある。もし東江兵餉を担当するものが戸部員外郎であって郎中ではないとすれば、東江餉司の行政レベルは新餉司の下に位置づけられる可能性があるろう。

(21) 以上の畢自巖の経歴は『明淄川畢少保公年譜』（一卷、畢盛鑑著、鈔本、東洋文庫Ⅱ—10—C—112）、『明史』卷二五六「畢自巖伝」、『光宗実録』、『熹宗実録』、『崇禎長編』、及び李華彦著書（注19）第三章「畢自巖的家世与生平歴練」を参照したものである。畢自巖の事績は、『明史』のほか、蔣平階の『畢少保公伝』（明季遼事叢刊）に所収、満日文化協会、一九三六年）に詳細に紹介されているというが、未見。

(22) 筆者が使用する版本は北京図書館収蔵の崇禎刻本である。この版本は一九九五年に上海古籍出版社より、『続修四庫全書』の一部（史部四八三—四九〇）として刊行された。『賦役全書』の編纂は、崇禎三年五月の時点でなお道半ばであった（「堂稿」巻十四、「修書司官遴選補題疏」一冊・六二七頁）。

(23) なお吉尾寛「明末の戸部尚書畢自巖の兵餉運営に対する一視点——『度支奏議』『堂稿卷』部に記載される数値史料を手がかりにして」（岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都大学人文科学研究所、二〇〇四年三月）は、一千九百八十四本とするが、「堂稿」、「新餉司」、「辺餉司」、「浙江司」、「湖広司」、「四川司」、「雲南司」、「貴州司」、「山

西司」「陝西司」で収録本数を誤ったようである。

(24) 佐藤文俊『明代王府の研究』（研文出版、一九九九年二月）の第一部第三章「王府分封と地方社会（初出一九九七年）」、第二部第七章「清初における旧明朝の王府莊田」（初出一九九〇年）を参照。

(25) 恵王は万曆二十九年に封じられ、天啓七年に湖広省の荊州府へ移動した。桂王は万曆二十九年に封じられ、天啓七年湖広省の衡州府へ移動した。（『明史』卷一〇四、「諸王世表五」を参照）

(26) 「福建司」には藩王のことだけではなく、外戚のことも多く述べられる。「山東司」には塩税収入の一部を藩王の宗禄へ提供する記載が多く存在する。

(27) 一例を挙げよう。天啓年間に湖広省へ移動した恵王、桂王に提供する工事については、戸部は各地の官庁に協済銀を出させたが、各地の官庁が規定の銀を完全には提供できなかった。そこで戸部は太倉庫より各種の財源より経費を支払わざるを得なかった（『藩工協済未清全楚京辺久通疏』、「冊庫」巻一、八冊・五五二頁）。第三節で述べるように、太倉庫が主に辺餉（旧餉）を支えている。戸部は軍需頻発の時期においても、手を焼く藩王に対して妥協せざるを得なかった。

(28) 崇禎年間、清朝が国境線を越え、何回も明朝の内地を攻撃した。例えば、崇禎二（一六二九）年十月、七（一六三四）年七月、八（一六三五）年八月、九（一六三六）年九月、十一（一六三八）年九月、十五年（一六四二）十月である。

『度支奏議』で言及される侵入は、崇禎二年の末から三年の初めにかけて、清朝が初めて中国の内地へ侵入した己巳の変である。

(29) 『度支奏議』に出現した漕運総督の官銜は一般的に総督漕運・提督軍務・巡撫鳳陽等處地方・兼理海防・戸部右侍郎・兼都察院右僉都御史である。なお、漕運総督に関する詳細な沿革は黄仁宇著、張皓・張升訳『明代的漕運』（九州出版社、二〇一二年二月、初出一九六四年）第三章「明代管理大運河の行政機構」で確認できる。

(30) 李洵『明史食貨志校注』（中華書局、一九八二年、一一二頁）によれば、南糧とは長江中下流における浙江、江西、湖広、南京、蘇州などで生産された漕運の米を指す。また白糧とは江南五府より内府へ輸出される白米である（同書一一七頁）。なお、江南五府は蘇州府、松江府、常州府、嘉興府、湖州府であり、現在の長江デルタに相当する。明末に入ると、白糧は五府にとつてすでに重い税金となっていた（『覆総漕総河題議催償白糧疏』「四川司」巻四、六冊・四五二頁）。

(31) 「雲南司」の序（七冊・五九頁）には、「余待擧度支日久、新旧二餉外、惟漕運為鉅、而区区節省拮据一念、実与新旧二餉鼎立而為三絲」とある。

(32) 「題覆比城考成捕塩各官疏」（「山東司」巻四、五冊・七一五頁）には、「国家設漕糧以給京軍、設塩筴以資辺戍、關係並重」とある。また「題覆長蘆塩院諭思恂条陳塩法疏」（「山東司」巻一、五冊・五九〇頁）には、「国家財用自稅

糧正賦之外、惟塩筴是頼。」とある。そして「題覆御史張養条陳兩淮塩法疏」（「山東司」巻一、五冊・五六四頁）には、「国家財賦半居塩筴、而兩淮又居塩筴之半。」

(33) 例えば、岩井氏は『中国近世財政史の研究』（京都大学学術出版会、二〇〇四年二月）第一章第一節「歳入歳出構造」（初出一九九二年）において、明末と清初の歳入構造を述べた。

(34) 「覆御史黄仲曄補還青銀劄報疏」（「広西司」巻一、六冊・五七〇頁）。草料を招商買弁の形式で購入する銀は戸部の太倉庫より支給され、「青銀」或いは「巡青銀」と呼ばれる。なお招商買弁、巡青銀の説明などは連啓元の「明代的巡青史」（『明史研究専刊』第十五期、明史研究小組、二〇〇六年八月）を参照。

(35) 明代以前の捐納、及び明代における捐納の制度化については、伍躍の『中国の捐納制度と社会』（京都大学学術出版社、二〇一一年二月）を参照。

(36) 陝西清吏司のことは『万曆会典』巻三十七、課程六、「茶」条に書いてない。また魏志靜「明代茶法研究」（二〇〇七年、中国政法大学へ提出された博士論文、CNKIから入手）第三章「明代茶法的發展」第一節「洪武、永樂時期榷茶制度的建立」において、明代における茶法の管理は茶馬司、茶課司及びある地方官庁と関係があると述べ、戸部陝西清吏司には言及していない。

(37) 「覆梁大司馬条議茶法疏」（『度支奏議』「陝西司」巻三、八冊・六五一頁）には、「……欽遵抄出到部送司。查得、

疏内茶法一款、事隸陝西司掌行、相应移付单疏議覆等因。」とある。なお、茶馬司は陝西と四川の両方に設置されたが、『度支奏議』の「四川司」では茶法に関する上奏文は見られない。陝西清吏司、茶馬司、茶法の管理とその沿革については別稿に譲りたい。

- (38) 「題議裁汰本部冗員疏」(「広東司」巻一、六冊・五五三頁)、「題主事盧世灌終養疏」(「広東司」巻一、六冊・五五五頁)、「題參梁応科仮印移咨疏」(「広東司」巻一、六冊・五五六頁)、「題郎中張朝綱請復俸級疏」(「広東司」巻一、六冊・五六六頁)。

- (39) 「查催司属赴部供職疏」(「堂稿」巻十一、一冊・四八八頁)。(40) 「計部奏疏」(李起元「計部奏疏」巻十「広東司」、《中国文献珍本叢書》に所収、全国図書館文献縮微複製中心、二〇〇七年六月)には広東清吏司が地方官の徴税に関する考成を処理した上奏文が存在する。もとより部内の人事を担当していたわけだが、さらには地方官の考成にも関与するようになったようだ。詳細な考察を別稿に譲りたい。

- (41) 表一を参照。多くの清吏司には郎中が一人、員外郎が一人いるが、陝西清吏司には郎中が三人、員外郎が一人おり、山西清吏司には郎中が四人、員外郎が一人いる。

- (42) 李華彦は氏の著書(注21)第五章「畢自巖の財經思維和規劃」(七十一～七十七頁)において、『度支奏議』に「欽奉上依覆查外解拖欠疏」(「堂稿」巻二、一冊・二七頁)、「辺塞呼籲日開京辺起解中断疏」(「堂稿」巻七、一冊・二七六頁)により、天啓六年、七年、崇禎元年における新餉、旧

餉、京運年例銀、旧餉の塩税に関する各地の徴収状況を整理し、表を作成した。広東省は新餉、旧餉、京運年例銀を全部徴収し戸部へ送っている。広東提學司は崇禎元年の旧餉塩税について、四七%の税金を滞納していた。

- (43) 「巡塩御史查究勢要頂名中塩例」(《皇明条法事類纂》巻十九、第一条。《中国珍稀法律典籍集成》乙編第四冊に所収)。(44) 「熹宗実録」巻一、泰昌元年九月甲午条、「戸部尚書李汝華請立新餉司、專理遼餉五百余万、而以本部原任主事鹿善繼董其事。上從之。」

- (45) 「熹宗実録」巻十七、天啓元年十二月辛巳条、「戸部議設冊庫一差、總十三司歲額錢糧、請鑄給關防。許之。」

- (46) 「熹宗実録」巻八十七、天啓七年八月乙巳条、「戸部請設督餉專官。得旨。辺餉重務、照倉場錢法例、宜專官、說得是。著將該部左侍郎加督理辺餉字樣、專董其事、公拳堪任的來看。至專理辺餉司官選精敏的、加銜用。其堂司官心鑄關防、俱如議行。卿掌邦計、辺腹財賦咸所提衡、還宜兼綜其成、以裕辺儲。」

- (47) 管理内容は注48を参照。全称については、「冊庫」に所収される上奏文を読めば了解されよう。例えば「題覆浙江山東甘肅冗官冗役疏」(「冊庫」巻一、八冊・五五五)には、「題為汰冗已經奏報、助餉不宜緩期、懇乞聖明敕令、速行扣解、以裕國計事。冊庫山西清吏司案呈、崇禎三年二月初五日奉本部送戸科抄出……」とある。

- (48) 「題王員外接管辺餉司疏」(「山東司」巻二、五冊・六〇一頁)には、「本部冊庫之設、總核省直之完欠、任基

重責甚嚴矣。先年臣部又以各辺辺餉無一責成、特題設專理辺餉司。凡各辺之額餉有無加增、京民二運有無完欠、各辺餉之可否生節、各辺事之條陳章奏尽以責之。仍以管冊庫官兼攝、是前此冊庫止職其入、今此冊庫復職其出、不勝其甚且難矣」とある。

(49) 例えば、支出を切り詰めるために、各地において人員を削減する状況、各地の官庁が戸部から借りた協済銀に関する状況などである。

(50) 「庫支日増外解日緩疏」、「辺儲匱乏已極疏」、「蒙恩簡拔敬謁芻蕘疏」（李起元『計部奏疏』卷十「冊庫」。三本の上奏文は「冊庫」に所収されるが、いずれも考成法と関わっている。冊庫司は税金の徴収状況、即ち滞納状況进行管理している。しかも滞納問題は徴収官員に対する考成と非常に深く関わっている。以上の二点により、冊庫司が徴税に関する考成を担当していたことが推測される。具体的分析は別稿に譲りたい。

(51) 新餉司の全称は注47を参照。

(52) 例えば、「辺餉司」には專理辺餉山西清吏司、專理新餉辺餉司、專理辺餉新餉司、旧餉司、辺餉司という様々な名称が見える。それぞれの上奏文の内容より、辺餉司の全称は判断し難いが、辺餉司を名称とする頻度は極めて多い。

(53) 京運年例銀、民運銀に関する説明は頼建誠の「辺鎮糧餉——明代中後期の辺防経費与国家財政危機、一五三一——一六〇二」（浙江大学出版社、二〇一〇年八月）を参照。頼氏は『万曆會計録』を中心史料として、著書の第二編の

第五章と第八章で民運銀と京運年例銀を詳しく検討した。

(54) 李氏著書（注19）第五章「畢自巖的財經思維和規劃」、七十二頁。

(55) 李氏著書（注19）第五章、七十一—七十六頁。

(56) 朱慶永「明末遼餉問題」（一）（『政治経済学報』第四卷第一期、一九三五年九月）。

(57) 林美玲『晚明遼餉研究』（福建人民出版社、二〇〇七年十二月）「前言」。

(58) 吉尾寛論文（注23）。

(59) 「新餉司」序（二冊・二八四頁）、「刻『度支奏議』新餉居其四五、刻新餉奏議芟佚尚居其二三。」

(60) 『神宗実録』卷五七一、万曆四十六年六月辛酉条、「戸部議添設督餉司属以便責成。謂援兵糧餉、除請免内帑十万、太僕寺二十万、工部二十万、先已解去。又議借南京戸、兵、工銀五十万、今已差官領解。此後收支頭緒甚煩、請照援朝鮮例、添設司属一員、加郎中職銜、給敕書、関防等項、随軍督餉、府佐軍衛營操等官、悉聽掣効、有勤勞聽本部考核優敘。從之。」

(61) 『光宗実録』卷六、泰昌元年八月壬戌条、「命給戸部專理遼東新餉関防、先是該部以遼東新餉煩鉅、議增山東司官一員專任料理、以江西司員外楊嗣昌陞補、至是請給関防、以杜詐偽。從之。」

(62) 『熹宗実録』卷一、泰昌元年九月乙酉条、「命造戸部專理新餉関防、為郎中楊嗣昌給也。」

(63) 前注44

- (64) 楊嗣昌が新餉司郎中を務めた際の上奏文は『楊嗣昌集』(梁頌成輯校、岳麓書社、二〇〇五年十二月)巻二「巻四で確認できる。その内容からは、他の郎中とともに勤務したことは確認できない。
- (65) 曾美芳「晚明戸部の戦時財政運作——以己己之變為中心」(二〇一三年、国立暨南国際大学歴史研究所へ提出した博士論文、台湾博碩士論文知識系統より入手)。著者は『度支奏議』における多くの上奏文により、崇禎二年～三年の戸部属官の表を作成した。
- (66) 『度支奏議』「辺餉司序」(五冊・二頁)、「同事諸大夫則有若三輔張鵬翽、二東王肇生、三巴喻思慤、三楚謝肇玄……」。曾美芳氏の研究(前注65)によれば張鵬翽、王肇生、喻思慤、謝肇玄はすべて郎中である。なお、張鵬翽も新餉司に勤めていた。さらに「新餉司」によれば、新餉清吏司が辺餉清吏司とともに業務を処理するケースが存在している(例えば「覆王岡卿拳効両広完欠各官疏」、三冊・五二頁)。こうした記録から、戸部内の人事異動では業務の緩急・多寡にしたがって、頻繁に異動する可能性が高いであろう。
- (67) 『熹宗実録』巻七、天啓元年閏二月乙酉条、「経略遼東袁応泰条奏、夷氛方熾……又言戸部之新餉司、兵部之職方司、工部之虞衡都水司、皆当与遼事始終……」。
- (68) 『崇禎長編』巻三十八、崇禎三年九月壬午条、「帝諭吏部、都察院曰、餉務殷煩、戸部尚書総領綱維、左右侍郎二員誼當分任、自今一管旧餉、一管新餉、及戸科給事中二員、一核部餉、一核辺鎮軍馬……」。
- (69) 剿餉、練餉はいずれも楊嗣昌の提案にしたがって徴収されたものである。新餉司・辺餉司のような専門的剿餉司は設置されず、ただ大臣一人に剿餉を管理させた(「敬陳案内第一要務疏」『楊嗣昌集』巻十)。なお剿餉の設置については、吉尾寛「明末の流賊反乱と地域社会」(汲古書院、二〇〇一年三月)Ⅱの第一章「明朝中央の反乱平定策——楊嗣昌の施策に即して——」。練餉の設置については、郭松義「明末三餉加派」(『明史研究論叢』第二輯、江蘇人民出版社、一九八三年六月)。
- (70) 練餉司の設立に関する詳細な史料は残存していないが、以下の史料から類推できる。倪元璐「倪文貞奏疏」巻八「覆奏並餉疏」、「……今據新餉司郎中張鳴駿、辺餉司主事劉顯績、練餉司員外郎陳辰誦会称……」。また崇禎年間に戸部に勤めていた戴運昌についての記載。光緒「祁縣志」巻六「選舉」、「中国地方志集成」『山西府県志輯』二十三に所収)「崇正(禎)丁丑科、戴運昌、戸部練餉司員外郎。同書巻七「郷賢」、「戴運昌、光啓子……又十年成崇禎丁丑進士……入為戸部練餉司員外郎……」。なお同書巻十四「芸文」「続増芸文」には戴運昌の伝がある。
- (71) 吉尾寛論文(注23)
- (72) 『光緒会典』巻二〇「巻二三」。
- (73) 『光緒会典』巻二四、「捐納房。司員滿洲六人、漢六人、掌捐納之事」。
- (74) 陳鋒「清代財政政策與貨幣政策研究」(武漢大学出版社、二〇〇八年四月)。